

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 李 孝徳



学位申請者 高木佳奈

論 文 名 酒井和也とラテンアメリカの「新たな芸術」
——帰国二世アーティストの移動と表現——

【審査概要】

高木佳奈氏から提出された博士学位請求論文「酒井和也とラテンアメリカの「新たな芸術——帰国二世アーティストの移動と表現——」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は全員一致して博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

審査委員会は、主査として李孝徳教授、鈴木茂教授、久米順子准教授、久野量一准教授（主任指導教員）、外部から柳原孝敦東京大学教授を迎えて5名で構成された。

【論文の概要】

本論文は、アルゼンチン、メキシコ、米国で画家、翻訳家として活躍した帰国二世アーティストの酒井和也（1927-2001）を研究対象として執筆された。帰国二世とは、アルゼンチンで生まれた二世のうち、日本で教育を受け、その後帰国した者のことをいう。翻訳家として、画家として、あるいは編集者としての彼の業績はこれまで断片的に知られ、近年その仕事を評価する環境は整いつつあるものの、そもそも彼の経歴から多才な活動、その相互の関係までを網羅的に取り上げた研究は存在しなかった。本論文は酒井和也について極めて綿密な資料調査を行ったうえで書かれた最初の体系的な研究論文である。

本論文が成し遂げた成果は、これまで不明な点が多かった酒井和也の経歴及び業績を丁寧に調査して体系的に整理し、また帰国二世としての経験が彼の芸術にいかに関与しているのかを分析し、酒井が目指した「新たな芸術」の内実を明らかにしたことである。我々はこれらの作業を通じ、20世紀半ばから後半にわたるラテンアメリカ文化の様相を日系人アーティストというフィルターから見るといふ、これまでにない斬新なラテンアメリカ文化研究・地域研究の次元に到達することが可能となる。その意味で、本論文は今後の酒井和也研究、ひいてはラテンアメリカ文化研究において参照軸となる重要な学術的価値を備えたものである。

本論文は3部構成となっている。

酒井の経歴が論じられる第1部「二つの海——日本語とスペイン語、文学と絵画——」は5章から成り、これまで詳細が不明だった酒井の両親や日本時代について、遺族へのイ

インタビューや新たな資料を踏まえて明らかにされる。二世として「日本人でもあり、アルゼンチン人でもある」と感じていたにもかかわらず、戦時下の日本で皇民化教育を受けた酒井は、自分は何者なのかと問い続ける。終戦後アルゼンチンに帰国すると、自らのルーツを模索するために日本文学の翻訳と日本文化紹介を行い、自己表現の手段として、絵画を制作する。アルゼンチンからメキシコ、テキサスへと移動を続け、常に表現の開拓を続けた彼の多彩な活動は、各分野に重要な足跡を残している。

第2部「『新たな絵画』への挑戦」は7章から成り、アルゼンチンでのデビューから晩年までの絵画作品を時系列で論じられる。酒井の絵画がラテンアメリカで受け入れられた背景には、ラテンアメリカ文化の起源とオリジナリティをめぐる議論があったが、アーティストたちはラテンアメリカ文化とは何かという問いに直面し、ラテンアメリカ文化の起源を土着文化に求める立場と、ヨーロッパ文化に求める立場の間で対立が見られた。それに対して酒井は、日本をはじめ欧米やラテンアメリカの様々な文化を取り入れて独自の表現を追求し、「新たな絵画」の創造を目指す。「模倣から創造が生まれる」という考えに基づき、あらゆる文化を自らの表現に昇華させる。それは日本の伝統であると同時に、多くの移民を受け入れて発展してきたアルゼンチンの伝統でもあった。書や禅の思想を取り入れた初期の作品は、アルゼンチン・アンフォルメル先駆けとして高く評価される。アルゼンチンは当時自国文化の輸出を進めており、日本にバックグラウンドを持つ酒井の作品は、アルゼンチン美術の多様性の証として積極的に紹介されたのだった。1960～70年代を過ごしたメキシコでは、国家の支援を得た壁画運動が圧倒的な影響力を誇っていたが、ナショナリズムの傾向が強くなっていた同運動と距離を取り、「新たな絵画」を模索する動きが生まれていた。酒井もこうした動きに加わり、「ルプトゥーラ (Ruptura, 「断絶」の意)」の世代の一人として活躍した。また琳派の曲線美とジャズや現代音楽のリズムを幾何学的抽象で表現した作品で高い評価を受け、「ヘオメトリスモ (Geometrismo)」と呼ばれる芸術運動を牽引した存在として知られている。またメキシコオリンピックと平行して開催された官展に対抗し、アーティストの自立を守るために「サロン・インデペンディエンテ (Salón Independiente)」を立ち上げた中心メンバーでもあった。米国のテキサスに移住後は日本の伝統美術を独自に解釈し、自らのスタイルに「翻訳」したともいえる作品を数多く残した。

酒井の翻訳について論じられる第3部「心の中の『日本』を探して——翻訳・日本文化紹介——」は6章から成り、解説や作品選定が分析され、酒井がどのように日本文化を発信したのかが明らかにされる。酒井は日本近現代文学に、東洋と西洋、伝統と革新といった一見相反する二つの要素の融合を見ていた。ヨーロッパ文学の手法を用いて王朝物を書いた芥川龍之介。米国による占領と「民主化」の混乱の中で生み出された戦後文学。現代を舞台に謡曲を執筆した三島由紀夫。抽象的な表現の中に、満州での個人的な体験を描き出した安部公房。これらの「新たな文学」は、日本とアルゼンチンという二つの文化を受け継ぎ、その葛藤を乗り越えようとしてきた酒井にとって、新たな表現の可能性を示すも

のであった。

酒井はアルゼンチンの文芸雑誌『スール (*Sur*)』と、編集長・グラフィックデザイナーとして参加したメキシコの雑誌『プルラル』の両誌に翻訳を掲載しており、ラテンアメリカにおける日本文学普及の重要な局面に関わっている。酒井が精力的に翻訳を行った結果、ラテンアメリカではそれまであまり知られていなかった日本文学が広く読まれるようになった。近現代文学のみならず、『源氏物語』、『枕草子』、『雨月物語』といった古典作品や謡曲も幅広く翻訳し、メキシコ大学院大学などで学生の指導にもあたった。その翻訳は単なる紹介にとどまらず、作家研究に重要であるとして芥川龍之介の「歯車」をいち早く翻訳し、古典文学の翻訳では独自の解釈を取り入れるなど、独創的な活動を行った。また翻訳と並行して美術、宗教、演劇といった様々な日本文化をスペイン語で紹介したが、こうした活動の裏には、マイノリティとして生き、オリエンタリズムと闘ってきた経験から、多様な日本の姿を伝える意志が読み取れる。

以上の考察に加え、先行研究をもとに酒井の画業として図版と展覧会一覧、翻訳業における業績として翻訳一覧がまとめられている。また酒井の実弟や、酒井と交流のあった日本文学者のドナルド・キーン、画家のビセンテ・ロホ、外交官の伊藤昌輝に対して行われたインタビューも補遺として掲載されている。

このように酒井の活動が包括的に考察された結果、翻訳・日本文化紹介と絵画制作には「新たな芸術」の追求という共通のライフワークがあったことが明らかにされる。それは様々な二項対立を乗り越えた表現の模索である。日本文化のみならずヨーロッパ美術やポップアート、ジャズなどのあらゆる文化を取り入れて生まれた作品は、土着／ヨーロッパの対立に疲弊したラテンアメリカ美術に対する酒井の答えである。抽象絵画でありながら琳派の伝統と関連付けられるヘオメトリスモの作品は、抽象と具象の境界を越境する。また数多くの翻訳を行った日本文学は、西洋と東洋、伝統と革新の相克を超越する可能性を示す「新たな文学」である。帰国二世として育ち、「日本人でもあり、アルゼンチン人」でもあると感じていた酒井は、異なる二つの文化を持つことは矛盾ではなく、むしろ豊かな創造性につながることを証明してみせている。

更に、酒井が求めた「新たな芸術」とは、分野を越境した表現でもあった。美術、文学、音楽を横断し、複数の表現手段を用いて相互的に創作を行った点が酒井の醍醐味であった。その最たる例が、琳派の伝統を受け継ぎ、ジャズからインスピレーションを得て作曲するように描かれたヘオメトリスモの作品群である。酒井は各分野で古いものから学び、新しいものを取り入れて「新たな芸術」を生み出してきたマルチアーティストであった。

酒井は日系人というエスニックマイノリティでありながら、ラテンアメリカ文化の中心で活躍し、そこに確かな足跡を残した稀有な存在である。美術、文学、音楽といった多分野で活躍し、日本とラテンアメリカの架け橋となったという点でも、他に類を見ない多才な人物であった。

酒井和也という一人のマルチアーティストの視点から、戦争に翻弄された日系移民の歴

史や、20世紀後半のラテンアメリカ文化のダイナミズムが再考に付された。酒井の地域、言語、分野を越境する作品を理解するためには、枠組みにとらわれない多角的な視点が必要であり、本論文は酒井の活動について、学際的かつ包括的な考察を行ったものである。

【公開審査の概要】

公開審査は、2018年（平成30年）2月22日に本学にて行われた。最初に高木佳奈氏より提出論文の概要と意義、今後の研究の展開について説明があり、その後、各審査委員が講評とともに質疑を行った。

【審査結果】

最終審査では、各審査委員から極めて高い評価がなされた。特に、先行研究がほとんど存在しないなか、酒井和也の経歴や業績について不明部分の多くを明るみに出した点が挙げられる。酒井が移動を続けるのと同様、著者もアルゼンチンからメキシコ、米国、日本各地へと彼の足跡を追いかけて丹念に調査を続けたこと。遺族や酒井を直接知る人々との友好的な関係の構築など、著者にしかできない多くの情報源にアクセスし、その成果が実を結んでいること。本論文をもってはじめて、酒井和也という稀有なアーティストの研究に着手できる環境が整ったこと。また、これまでは翻訳作品にのみ焦点が当てられることが多かった酒井の功績を、画業を含め広範に研究対象とし、20世紀半ばのラテンアメリカ文化・芸術運動の中に酒井和也を位置付けて論じたことである。

もともと、問題点がないわけではなく、審査委員からは、ラテンアメリカの文化論における酒井の位置付け、コンテクスト化が十分に行われたとは言えないとの指摘があった。ラテンアメリカ文化をめぐる議論の中で酒井が注目した「模倣から創造が始まる」という態度が酒井の芸術実践とどう結びついているのかの検討を行うべきだったのではないか。酒井の芸術作品について、酒井本人の言葉に依拠し過ぎているのではないか。芸術家としての酒井を捉えるには著者自身による読み、何よりも著者が批評的視点をもってのぞむことが必要だったのではないか。翻訳作品を具体的に分析するなどして、酒井の特質に踏み込むことはできなかったのか。

このような問題点の指摘と質問に対し、高木佳奈氏は一貫して真摯に回答を行った。著者が研究対象を論じるにあたり、極めて誠実かつ慎重な手続きを踏まえていることが改めて示され、また、あわせて今後の研究の発展可能性や方向性が提示された。

以上のような物足りない点は指摘できるとしても、酒井和也研究が本論文をもって創始されることは揺るぎない点であり、その極めて高い学術的価値は疑いようもないことを審査委員全員が確認した。

以上、審査委員会は全員一致で、本論文が博士の学位にふさわしい成果であるとの結論に達した。